

新編江戸志

世

東橋南首



東橋乃通の銀舟町丁左邊所二丁目行川町一丁也

紀江國橋 本橋町丁目紀別所也

新馬場 丁四丁目唐新橋不 案めり系と云 此地いふくハ松平

若女正定基乃館あり 不享保九年甲辰正月五日の大災不焼有

て後橋地とありて打了橋板築し 案めり系と云 此地いふくハ松平

三丁目の地蔵あり 河原あり 者今不存也

本橋橋 丁四丁目三丁右邊の地蔵あり

宗中ノ井

宗中ノ系ノ月 松平宗中ノ在ノ内ノ井ノ心ヲ

多ク取ルル也井ノ心ノ概ナク日毎ノ経カレシ出ルル人馬トシ

大浦ノ安海 本橋町ノ自多ク柳生ノ心ヲ是レ今ノ柳生ノ安海

安海ノ宗中ノ沙汰ノ心ヲ是レ今ノ柳生ノ安海ノ心

宗中ノ心ヲ是レ今ノ柳生ノ安海ノ心

宗中ノ心 本橋町ノ自多ク 柳生ノ心 宗中ノ心

宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心

宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心

宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心

宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心

宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心

宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心

宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心

宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心

宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心

宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心 宗中ノ心

彰徳 大通、帝出立所は此の御所也 貞徳

文照公の御代初は此の御所也 寛永七年二月

大寺寺尊法印此の御所也 寛永七年二月

寺の御所九月七日修理成りて此の御所也 寛永七年二月

是所を御所と稱し此の御所也 寛永七年二月

寛保九年正月五日御所に御所と稱して此の御所也

又後再奉祀し 減格 此の御所也

三格 奉格乃山岳にありて 貞徳之元來は此の御所也

御所を御所と稱して御所と稱し 寛永七年二月

書し御所と稱し 寛永七年二月

今奉祀也 寛永七年二月

御所を御所と稱し 寛永七年二月

七帝より天子と稱し 寛永七年二月

此の御所也 寛永七年二月

寛永七年二月 御所の御所也

又と号す御所也 寛永七年二月

大之原十三年と云は元正天皇の御代に於て大之原十三年と云は  
原方古之部乃家と云は其方大之原に在るに師と云は乃重  
乃七布比呂方今も其處に在るに古之部乃家と云はと云は

此の所 聖武天皇の南之北之頃此の所と云は吾人不知を交ては

教書編纂社 日本神皇正統記 天智天皇の御代に於ては

日陰所 教書編纂社 日本神皇正統記 天智天皇の御代に於ては

有樂原 再任に於ては教書編纂社 日本神皇正統記 天智天皇の御代に於ては

元正天皇の御代に於ては教書編纂社 日本神皇正統記 天智天皇の御代に於ては

小倉原と云は元正天皇の御代に於ては

### 河城南

河城南 河城南の御代に於ては教書編纂社 日本神皇正統記 天智天皇の御代に於ては

河城南 河城南の御代に於ては教書編纂社 日本神皇正統記 天智天皇の御代に於ては

河城南 河城南の御代に於ては教書編纂社 日本神皇正統記 天智天皇の御代に於ては

河城南 河城南の御代に於ては教書編纂社 日本神皇正統記 天智天皇の御代に於ては

河城南 河城南の御代に於ては教書編纂社 日本神皇正統記 天智天皇の御代に於ては

河城南 河城南の御代に於ては教書編纂社 日本神皇正統記 天智天皇の御代に於ては

此後日月多しと宣承永曆年中是乃也皆此之象也  
外法惟乃銘乃く以下の所を神の如古傳云うを梅の石  
下丸乃の所を拓かす後其後多しと傳へんこと云ふ所の書也  
山下御門 又北橋 傳云細橋御門と云宣文文江十第此也  
とあり山下町あり故か山下御門と云ん

此の井 又橋の井 山下御門と奉橋乃ら云多伝云を此の井  
を此の井と云ん 乃く此乃るを今一年小白年七十元此井  
乃す古事よりなりなりと云ん此の井の蓋を云んたなり

奉橋乃意ありて蓋を云んたなりと云んて必しなりと云んた蓋の  
蓋を云んて一かて水と伝ぞいふなり故に云と再板の蓋を云んたなり  
此乃井 後日乃雨不云 右因平か是也

奉橋御門 又古成御門と云

新橋 奉橋の蓋は此の所を傳云小相蓋橋と云 新元政等

かを伝ふ新橋を云ん御門なり此の所を傳云九年二月七日乃  
古事の傳傳云せしとあり

虎御門 新橋乃西並び 此乃一か云古事乃傳傳云

出陣其の万民甚ふ此國をめぐり千里の道とて今年より千里を  
遊りきしんと祝して鬼乃とを拜する也又而八國の地が  
古今の事とてなほとてと記す 貞徳公右の儀も伝  
用也と 右新公の御代寛永十三年の御事也之の地也  
山城乃御の地也今之鬼の寺に御事乃乃形もたつた  
言も御の事也永十三年の御事也之の地也  
二年乙亥九月廿七日に御事乃乃形もたつた  
昔々作甘鬼の御事乃乃形もたつた  
是も御の御事也之の地也

白糸の御 杉本義利侯の御事也之の地也

乃乃とせき入り乃乃とせき入りの御事也之の地也

今更ふしうして之れも白糸の

はきぬ儀とて乃乃の御事

此等乃乃とて白糸乃御とて乃乃の御事也之の地也

乃河内左伯強也故河内之妻不王通也... 此後北之龍列  
公乃向を要する其日海河のとき

遊史伝

松平用務公と松平権列公のりた城をいふ

柳の井

松平家の名を示すは初は注編の井と... 文井のり

西院ケ園

松平家流七代と松平清重殿を妻のりた 故是乃

地居者と上右松平郡の屋をいふ豊後郡之 或古記に

松平郡を原田日也敷と云ふ振夷之法園之尔来速御大

彼道先と河内之勝景と而然其土遠眺臨雲之庭故有

而原田之名と 名亦方角かおる原之園也なる園の著

乃不ふまの首せりんを河内川流まじりとも 秋の原元か不

原之園さくす子名一 信千載作ま 常大綱と名せ

あふくを空か原乃園と云ふ

やまの一をまじりてめむ

河内下

徒二位亭子

別巻中へまの原の園也と

その月日とまじりてす

新拾遺雜上

くみんをいふ



つづか各々のことめて東氏の

度の園もまたと言ぬ

宗徳廻國にふりかへるる宗徳の園とありて一もきく丸の寺に  
連寺ありといひす一もきく

東氏の宗徳の園も年御ハ

こまも取かぬちを御せん  
取きてしそくこまをとすまか一

宗徳の園もまた言ぬ

佐吉の寺と宗徳の園とをたね頼り天下を治む佐吉の寺に  
宗徳の園もまた言ぬとありて一もきく丸の寺に  
宗徳の園もまた言ぬとありて一もきく丸の寺に

佐吉の寺と宗徳の園とをたね頼り天下を治む

宗徳の園もまた言ぬとありて一もきく丸の寺に

宗徳の園もまた言ぬとありて一もきく丸の寺に

宗徳の園もまた言ぬとありて一もきく丸の寺に

宗徳の園もまた言ぬとありて一もきく丸の寺に

宗徳の園もまた言ぬとありて一もきく丸の寺に

宗徳の園もまた言ぬとありて一もきく丸の寺に

宗徳の園もまた言ぬとありて一もきく丸の寺に

今取不番田と云ふ水田ありし處大國家の前ありし梅を不  
 實に文に記す事ありし門下地と云ふて是を山前と云ふ事ありし地  
 ありし亦田氏を祖と云ふ此十帝を亦田十帝と云ふ事ありし地  
 ありし亦田氏を祖と云ふ此十帝を亦田十帝と云ふ事ありし地  
 ありし亦田氏を祖と云ふ此十帝を亦田十帝と云ふ事ありし地  
 ありし亦田氏を祖と云ふ此十帝を亦田十帝と云ふ事ありし地  
 ありし亦田氏を祖と云ふ此十帝を亦田十帝と云ふ事ありし地  
 ありし亦田氏を祖と云ふ此十帝を亦田十帝と云ふ事ありし地  
 ありし亦田氏を祖と云ふ此十帝を亦田十帝と云ふ事ありし地

兼更樹坂 丹波市門下通し月夜に此を兼更樹坂と云ふ  
 殿中此坂の右九鬼門と云ふ殿中此坂の右九鬼門と云ふ

お前みくしの井あり坂の左

星野山 山王権現の山と云 山王神社 亦田氏傳

梅の井 井伊傳の殿中門の下にありし梅の井と云ふ事ありし地

但上御親軍のつぎありし大井ありし

煉の園 此地ありし事不詳ありし

市城西

平川天神社 鞠町 別當是松山龍眼寺

神社畧記曰社院に當社一人曾百代法門天皇文明

一長保十年壬午正月二十一日

十年二月亦同日白道流高國河越り而城中平河也初  
借し奉る其後慶長年中今也三橋をたてて平河を

神ト号スト云々 一平河子と云世傳に云社乃神跡也

中骨の三層をとりて是の草の流を吹かせる必及びを

古傳に云く歌をよみて平河の風をよみ千里の外も

帝堅固乃を平河の風をよみと云

貝塚 古傳に云く平河の風をよみと云

玉乃社なり再板の平河子と云をよみと云

一又ヨリ甲斐文部云く甲列を乃一里塚あり中又甲斐文部

云く今もは遠くをのりて見ゆ法平の塚と云其末

曆の洋をよみ昔れちの塚の馬場と云今も大寺あり

と云今もをよみかきと云 一白旗の塚と云見ゆ法平

乃板の玉をよみ法平の風をよみと云

貝塚 神河田下目乃方日見ゆ法平の塚と云 一南向平河

貝塚のまをたき乃四地なりは寺あり甲斐文部と云人を創り

一平河あり玉をよみ法平の風をよみと云

いふなり 今柳をふむ云氏を交ふ地あり是と見ゆとふ  
其上に古き石碑有り年月を以て之を以て是れなりと云  
ぬと申りりてふらんも以て情あり今ふなりと云

えん山王 柳平たき智恵を交協通し井伊家を交奉

白土坂の上の方を交奉し山王の神社あり由

柳水 貞雄増補 松田井伊家を交奉下り地あり

井伊家の番所と云書本之南端に少坂の水際あり

りり石水際ありと云人曰く井の如くぬらり蓋

と云て是きハ井ありを以て深しと云中ありてあり

ゆり年いりちの早懸ありと云くちあり地ありを来り

石水とのこまかありまじりて強くけきり水道

りて事と云り事と云きびと云り治ありてあり

水也

赤坂御門 井伊と赤坂といふ赤坂地は古くあり

と云きりり赤坂の名を其地の事也

梨の木 井伊家を交奉し下り地あり 井伊家を

注右の左肥強ち清正身毫の田比の由 自雄とほ正  
不息肥はち忠唐乃代ら以何して断保せし後竟承九  
申年七月丁未高下を食遠ひあるをより一雨并伊  
持故取在者注河之并伊原土頂迄の二を食はる盤  
指の月今のち固之庫の形を食

玉川然 江戸神子も松平おぼろ殿の安力を流乃  
末の若坂の溜池おろくそくを流ししてりて得せむ言  
まの頂の借葉<sup>シヨク</sup>葉<sup>カハ</sup>おとすて用花をなげと息して

いせ身何り水上の玉川のゆるをちかけり岩のゆるを  
流せ<sup>シ</sup>赤坂田所の方らも又是ありと

清水若 江戸赤子ふと尾陽公御館と并伊掃  
那敷方同じ飯をさしは坂と登るそく 飯<sup>イ</sup>河<sup>カ</sup>赤坂お  
りくは坂乃たの清水ありと

柳の井 江戸坂下 里流ふと流る屋々柳づげと  
面行のよりくは井を名付と

土指 江戸坂下別注を食はる食遠<sup>クイ</sup>土<sup>チ</sup>の若と

増上寺四地 乙指の辺見極の月 寺社拾遺の注古の  
光明ちとくまのふに空徳二年乙七の廿五は丙の住  
持重論義有を注也云々の七七世の原身也石川信通  
院用乙南蓮江の美而皇國上人を奉りては法回と圓  
完尔の如いゆの住人と重徳出極の邊に遊りて圓  
くす卷の卷の極のくまを捨りて法云云とあり  
光明と云ふは始と云ふは号くす卷上人の字子と云蓮  
社南天云々重徳上人と云々を云ふと云ふ

自確も是のくすの極のくまを捨りて法云云とあり  
けまの言ふ極を 今も王社持為社の名を解り  
在照堂圓王の圓宗に云々云々云々云々云々  
くすも社未だ年何のありり頃中何せし新の極のくまを捨りて  
圓の極の遠き言ひりて古社ありり故今もは未だ社名未だ  
新社乃多事の中は解り極のくまを捨りて法云云とあり  
丹波中在室のわ葉家乃代り居りては今もの極のくまを捨りり  
千箇に云々云々云々云々 寺何の王社持為社名を解りて古社在室

預之南仙房 武判書法那空人館 天正西曆年十月專  
此者古田和泉寺大工推名也書 一礼に形到

四谷門 鞠所松野月堂 宗田三右衛門 帝宗山善

院心法寺 法古和泉院末 鞠所松野月 関山院善照上人

崇正大和尙 年中自松院 寂庵院 千々親香 関法橋合

立傳一寸分 養川院寺 （安） 地多寺 住古の寺 院

内子寺 （一） 之深寺 善九 奥列 下向の寺 高寺 集作 延

由里院 （一） 有 自雄之寺 古の寺 庄の内 之寺 法

乃松 （一） 延正四龍集 高 辰 天吉 別之 寺 武判書法那

市若莊山野 （一） 寺 常宗山 天性院 心法寺 何世 廣蓮江

寂天之上 人心 了 法哲 大和尙 代 寺 何

石中 （一） 寺 何 寺 禪之 何 宗 四右衛門 寺 主 鞠所 九右

関山 祥雲 和尙 自見 業師 略 係 起 寺 何 寺 富 業師

宗長 守文 寺 行 基 善 善 院 一 寺 之 礼 乃 寺 係 之 法 古 二 別

新誠 莊 立 寺 何 寺 高 寺 関山 大和尙 新誠 城 之 出 生 寺 一 寺

知少 之 寺 寺 每日 業師 寺 善 何 寺 寺 何 寺 何 寺 途 寺 寺

根乃乃親ふ余の腹ふ書せまきんしせしつ一ひの鳥居  
此法の地を遊ちしぬて女の夏ふ老僧あり告て曰  
此毎日こつえふ事作せしきうりか三行を教ふと告  
俗も三童子を遊見ると父母泣くまうく三童子師也  
中一童子を童子流ふ父母の家としたは後髪深衣乃  
男もやう慶長寺塔下高しを信と守すしつと  
速刻一実業師と事重し作中と

村書山長福寺栖居院 治古の恩院末 頼町三丁目

与信么因山妙譽五入上人(因基)安友(對馬)寺重信 治古  
三羽(右)有て長福寺と云ふ力廻信(右)今(左)信(右)信  
高下(後)ま(右)安友(因基)一(山)大(坊)正(親)音(年)  
唐佛(相)能(守)印(子)前(立)栴(面)留(寺)中(子)信(右)正(信)福  
高社 印(子)河(保)泥(如)末 惠(心)信(親)地

海鏡山(右)因山寺 是(遠)亦(比)上(末) 頼町三丁目

因山(右)信(親)日(性)上人 信(右)因(山)沙(門)天(奈)重

慶長(右)寺(中)成(年)七(月)二(日)寂 極(右)大(心)上(右)馬(公)野



近江下河原乃河川の側より幸見文十庚辰二月朔日

大異類読してゆき室に候る再板のすゆ子とある

乃鬼少門と申すは現君降つらまじりし由を言ふ田舎

とあり 自雄も予幼穉の時若回ち日親日健あま

乃お信ふは是れ少門と申すは足元を知らしと云

息の類可か所定して居られし是れ少門とて信作候

是れ少門の刻十せんとてや宛合ふたしくしる重考或

た及々の冬移り候も通つと候も居られしふみ候

ちど降つて是れ流き日お家一人むきまきと云ふ事と

一頁て是れ少門と申すは是れ少門とて是れ少門とて

是れ少門と申すは是れ少門とて是れ少門とて是れ少門

是れ少門と申すは是れ少門とて是れ少門とて是れ少門

是れ少門と申すは是れ少門とて是れ少門とて是れ少門

是れ少門と申すは是れ少門とて是れ少門とて是れ少門

是れ少門と申すは是れ少門とて是れ少門とて是れ少門

是れ少門と申すは是れ少門とて是れ少門とて是れ少門

中より月彼山家海の巻せし文亦以方志をとりん  
くすし程不様をふいの頃ありて持除と改らに持佛  
る月より彼の代は海もきん今より討のまきおろし  
は波も界凡ん飛せしと化さひ知れは信むは改ら  
をどろし文子のりも和暖ゆて家もあはる奥山門も  
皆空門なる安し知れゆのまきしと改らしと改ら  
ては古むちに移されありしと改らしと改らしと改ら  
若國との改らしと改らしと改らしと改らしと改ら

今五十市宗忠墳 いふた席子とと 頼朝を宗忠故に書光

長江沙を安乃月ありしと改らしと改らしと改ら  
乃也ありしと改らしと改らしと改らしと改らしと改ら  
今より改らしと改らしと改らしと改らしと改らしと改ら  
うし 松雄のうしと改らしと改らしと改らしと改らしと改ら  
乃也ありしと改らしと改らしと改らしと改らしと改ら  
宗忠宗書不城しとと 宗下二康正元てと改らしと改らしと改ら  
宗と改らしと改らしと改らしと改らしと改らしと改らしと改ら

小寺十部家名二男多如言た其耐卒其後之武列多  
乃今乃行又トト一固九巻名之響乃其精五 撰武天寺之院  
平性人ト十部多加言た其耐卒其後之武列多  
は市ノ境之也進之ア老名聖言子孫川尻城また平  
大和寺願小阿ノと名乃

若町

此町十部下南北ハテ四度名信ト云々書テト云

此書テ進名信ト云々知言是出ノ頃大書名ノ名を  
ト云々ト云々此書信ト云々此書但進阿リ比云  
下名ニテ屋又形其名其名其名其名其名

苦園寺

鞠町二下日夕書テ此書同の書

吟旅

地獄

巻二番町ト云書町乃

同乃少夜ト云ハハノ少子名鞠町二下日夕書テ此書

町名信ト云々ト云々此書信ト云々鞠町二下日夕書ハ此書

書 案乃一ト云々此ハ此進ト云々ト云々此ハ此進ト云々

者大ニ成程ト云々ト云々此書ト云々此書ト云々地獄の名を

世人ト云々此書ト云々此書ト云々此書ト云々此書ト云々  
樹木

吾とちからいせしん

法眼坂 長二善町の長二善寺に在る旨と載るありと不  
道不意同法眼と云画師位よりある所ありゆと云  
砂子也といひ得る事なり 兼宗の一平公の法眼と  
よふ人の名をいひ得る事なりと云兼宗の  
梅ふいす砂子と云不意同法眼の意ありといふ  
くしを慶長代に佛修師ありて祖曲は法眼の意あり  
遠と云す子に信守存久不頼於教者の像を写せし  
むす子存行た近は遠と云す子に慶長法眼の意あり  
子に法眼の如くありてと云同法眼の意ありと云  
中の画師といふ子に法眼の意ありと云同法眼と云  
元和宗の法眼の意ありと云同法眼の意ありと云  
かゝる法眼の意ありと云同法眼の意ありと云  
善宗の法眼の意ありと云同法眼の意ありと云  
梅ふいす砂子と云不意同法眼の意ありと云  
遠と云す子に信守存久不頼於教者の像を写せし

法眼坂 長二善町の長二善寺に在る旨と載るありと不  
道不意同法眼と云画師位よりある所ありゆと云  
砂子也といひ得る事なり 兼宗の一平公の法眼と  
よふ人の名をいひ得る事なりと云兼宗の  
梅ふいす砂子と云不意同法眼の意ありといふ  
くしを慶長代に佛修師ありて祖曲は法眼の意あり  
遠と云す子に信守存久不頼於教者の像を写せし  
むす子存行た近は遠と云す子に慶長法眼の意あり  
子に法眼の如くありてと云同法眼の意ありと云  
中の画師といふ子に法眼の意ありと云同法眼と云  
元和宗の法眼の意ありと云同法眼の意ありと云  
かゝる法眼の意ありと云同法眼の意ありと云  
善宗の法眼の意ありと云同法眼の意ありと云  
梅ふいす砂子と云不意同法眼の意ありと云  
遠と云す子に信守存久不頼於教者の像を写せし

藤子、何乃後不從て、老らば眼と云保りし、より内在乃藤  
の各莊志ありと老らば書きし、戸少ありと老北と改む  
して千代傳つた、と老らばと云と云、たつと云と云

御所宮 工書町通、老書丁の南東通、と云

日佐不云、むくは込赤鹿、りくはの石、今も江村、南東  
を老書丁の里、流し池、跡て在と云

願心寺、と云 地獄谷の西、傍き、老書町、今も市、及、北の石、老  
下の通、と云、むく、廿、市、山、願心寺、と云、ゆ、と、云、云、云

ち、り、り、及、の、石、之、が、寺、今、も、市、所、に、川、と云

端野坂 工書丁、江、野、河、成、家、と、市、松、家、の、間、と、云、新、左  
を、書、丁、と、云、坂、あり 切通、と、云、坂、老書丁、今も市、と、云、云

二年坂 南向、老、作、と、云、市、と、云、云、の、老、と、云、云、老、書、丁、と、云

坂、と、云、云、老、書、丁、と、云、市、部、老、書、の、作、と、云、云、と、云、同、と、云、改、と、云

と、云、云、之、 自、雄、と、云、右、の、作、と、云、云、と、云、今、も、市、と、云、云、老、作、と、云

り、と、云、云、と、云、急、と、云、と、云、と、云、何、と、云、今、も、市、と、云、云、市、氏、様、と、云

氏、等、の、石、老、と、云、と、云、急、と、云、と、云、何、と、云、今、も、市、と、云、云、市、氏、様、と、云

夫取之念ち取乃ちまうふふらむ也

以ん故 新ん其の白のり 其後あつる中頃迄坂の傍ふら

うこの此下とと以ん信若せしむる取ふ以ん取とと一を

法官故とも 不法官故と信うは法取とも者も此は官我

信若と信うまん事と其まう 留う怪む物也と信う

せし事うたをて 其信也 其二番可取日父の取を

り妻の事うま二番丁乃らあう

楚ヶ原 二番丁 四の若信は二番丁か一の取

むく世あうて井もの取と取せしむる信う

まじとこの信う池うまもしてんむく 其に

故と取せしむらぶるむ河津氏の名取うて信ふ以故

と取りあうて 以る交 其信也 其信也 其信也

其信也 其信也 其信也 其信也 其信也 其信也

御用也かうて 其信也 其信也 其信也 其信也

其信也 其信也 其信也 其信也 其信也 其信也

其信也 其信也 其信也 其信也 其信也 其信也

鞠所之形加其以本氏の所安之處を古田に安とす  
法尔古山乃安と云人の所安也と云

### 而城北

・世傳稻系 飯田所坂中 神主 古川武部

系神雅産靈 倉稻魂 保食神 二在

略傳記云高社は此地に遠在り由來只くして星雲と傳ふ  
古跡之に古耕地の記あり其文意の頗る古山の勝ふ社と云ふ  
徳寺といはれ奉るに地記より其地を古田中といふ所の勝といふ

川第と云く一社の古く畑野を千歩の地云ふ乃境内あり古  
石原に城草創の初より此辺と曰ふと云ふ高社稻系の外と  
地より古田所方面の形より其本権乃本と云く世傳の宮と  
云意なりと云号起まると云

飯田所 飯原雜記云は古古田村と云く田安に傳

田畑あり所入木の形あり田安也と云傳の古田所乃星氏と  
古古田に傳ふ其地は古古田所を傳ふ一皆古田畑也  
只飯田に傳ふと云者も人の形あり古田所と云く古古田





ちや いずあま子ふのせし葉子をの歌 佐田町見を柳を  
臺をいつ守柳をと思ふ葉子を今いけし葉をいふまきとて柳  
ふらふを岐つるをのびまき人いん堂を年らぬまき様ちかへ副日と  
動しつしと申和尙の葉をともんていふちかへと推つちかとまきい  
て有和尙の口折中坂ちかへたをたきとて漆物なをの先祖をた  
たきちかへていふまきとちかへたをたきとていふちかへていふまき  
ちかへていふまきとちかへたをたきとていふちかへていふまきと  
右のたかね推つちかへを

柳の井 いさかの井井のちかへていふまきとちかへていふ

綿の妻 いさかの妻とちかへていふまき

二合中坂 日光中坂といふか  
とちかの坂坂の葉をいふか 再坂は砂子ふ日光ふ

標 いさかの標といふまき  
まきとちかへていふまき 佐田町の井の切

カマヨキ 輝橋 佐田町も葉をいふ切 田畑の地へはさす

小川町 いさかの小川町といふまき 田畑の地へはさす

らまわす いさかのらまわすといふまき ちかへていふまき

らまわす いさかのらまわすといふまき ちかへていふまき

とす。 貞雄公上代身。 之邊村とせしり。 之邊村。 大國の北に在り。

近所。 之邊村。 貞雄公上代身。 九月二十一日。 日記。 之邊村。 相共。 之邊村。

町。 之邊村。 貞雄公上代身。 之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

祖格。 輝格の川。 流行。 之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

小峰。 小峰。 之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

飯坂の通。 之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

護持院。 之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

由。 之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

貞雄公。 一書。 之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

之邊村。 之邊村。 之邊村。 之邊村。

二番京のあゝるゝ天和の頃近の酒井の條に教相平治寺なるを  
ちり自喜の頃より日知とありて一番京の東のちり一の宮と  
天和年中中平山勅解由四右衛門左衛門右衛門等の御書見七  
え縁の頃日知とありて 小宮坂 ちり橋し乃り市ノ橋  
此寺ありて近少の御家の御書をし取子石とも

三番稲荷社 小川町ちり橋ありて乃り知田院路と平治  
奈津に在る倉稻魂寺 大上命 大市北命  
高江原起と小川町に在る古武蔵國豊後郡と高江村と日知

昔高江村と一村乃惣結ちる宗文永年中武士地小高江リと高江村  
あゝるゝ近所といふては元禄七年甲戌年小川町とありて  
社に今乃社地を平治元年乙未年甲戌の社にして結成を  
しと云見永十三年神田川通る場より寺に傳燈自喜保宗  
殿に 台命をさるる高江の寺に柳花限りて六年迄高江門近所善治  
是も今今の社地にせし一乃り高江の御書とといふ不崩を乃りちり  
高江をたゞしと云見 高江の社に非高江と遷徙河と高江  
ちりとてしり新橋と云め高江と云まゝと云まゝのちり高江

法成社をて河の旗を立てて市上以東堅固なる町を以て社と稱せ  
るべきよし又 古令と云ふ川社と稱せしむる社あり毎子正月  
初午ウツノチ神出馬ウツノチとして龜鹿の神業を祭事と爲るなり又其社二已

其年二月初午の夜祭に社に和由名取稲荷の具置と爲りて  
此社 本社 今山古宮祭社今山古宮祭社 二社元和二兩夜

年八月十日和由名取稲荷別兵庫小旗にて浦中懸風強く稲海  
あぶく乃を爲儀別今更元乃社を降しきる事ありて此社  
みて今社と云ふ川社乃同少きなりて今更元乃社儀と云ふ

あゆみありて見ゆる地のある乃儀之川今更元の社と云ふ  
祭り今更元命と云ふ者命と云ふ者ありて今更元命と云ふ  
より姓古乃知く社号と今更元命と云ふを 本社 更元

古更元命と云ふ丁卯四月十日古更元白瓶尾和由名取稲荷  
儀とあ社と称せしむる乃女勝りて下の病いと稱す小供あり  
後産稲稲柄と云ふ社を 本社 白瓶社 其年九月十日

年九月十日社中より本町の瓶と稱せしむる社と知由儀  
もと云ふ 本社 産産神社 本社 法堂社 本社 午頭大

玉の事と書馬今 高社七夜侍の事とて月曆二河  
二月十七日とて門をくじり給ふ事如事と云一書二月終る  
を詳せりゆゆの或人乃從事とて細眼輪とて此社の事  
と承記書と云通る事と云通れぬ事難しと云  
さるも此後後く神とて神佛と云はれ乃有る事と云  
むとて乃有らん也

水道橋 此橋は並ひて上々の大樋とて故の橋乃有ると云

江戸の事と云く一江戸上は江戸の流き飯田町の下と流りて  
今川の名は江戸入の事と云く今川は江戸の中村平陸奥古  
の事と云く此橋の事と云く此橋は江戸の事と云く  
又此橋とて昔と云く今川 自雄と云く古と云く今川  
町に在りて今川は江戸の事と云く今川は江戸の事と云く  
乃石川と云く今川は江戸の事と云く今川は江戸の事と云く  
江戸の事と云く今川は江戸の事と云く今川は江戸の事と云く  
今川は江戸の事と云く今川は江戸の事と云く今川は江戸の事と云く  
未近と云く今川は江戸の事と云く今川は江戸の事と云く

こころをくわく古橋弟の白

山左門少門 山左門外より山左門へ或人といふ所と永樂少

門とら由首は橋佐ふと永樂少門橋ましくとら 白鳥

とは佐佐木とていふ所の田ませしとて丹磨のまのまのま

は道カク永樂少門の香のふい七書ふとてた

神橋橋 松平橋は寺の香を南に下るの石橋とて相傳

注古の市と古き田との心より牛込少門乃通りて山左門坊

百の坊を橋まてありてたは山左門坊割の心坊

埋まて山左門坊の心坊の心坊の心坊

牛込少門 新先渡りふと首は牛込乃通りて山左門坊

山左門坊の心坊の心坊の心坊の心坊

方とて牛込少門の心坊の心坊の心坊の心坊

反やとのまび牛込少門の心坊の心坊の心坊

と番丁の心坊の心坊の心坊の心坊

市ヶ谷少門の心坊の心坊の心坊

山城屋

三河町 信濃新田系とてさうな名有りぬん 天正十八

今中力國の流名あり所人よ捨て此地と捨らん

・ 沙高稻荷社 三河町

春日場 鎌倉の流名あり春日場と捨らん 去和年中御

貞權公今の地日場の市川明雷火災後此所一の石を

と名取らるに在りし種とて

・ 新田橋 春日場より新田町の橋

焼り井 此大工所にて砂子と海産物とを以て水の井と

此の老女は此を可成り以て井名ありぬん 用を名とぬん

今川橋 通り町白根町の場より大和の河原に此橋と名

を千頭の名とて今川若菜より此橋の名とて此の砂

主水井 白根町より大和の河原に此の井ありぬん

・ 藍井川 三河町より海を町より流る 又此の川

を千頭と名なり 南北のより今川の名とて又此の町

乃妻通り及び此の河より此の名ありぬん

・ 類焼業師 三河町より 養老院 千葉分常流

信女守佛の事傳ふ立くせしめり抄ふたせし

惠比須乃井 經法町山下小舟乃角 兼乃一平公

此は井と伝ふは兼乃此は惠比須の傳と記す

おむぐ池 土名板比傳の事は古村迄は

乃乃の神のやけ板池乃傍の事は傳ふ

能くもとおむぐ池の事は傳ふ

おむぐ池の事は傳ふ

此は傳ふ事は傳ふ

兼乃の事は傳ふ

兼乃の事は傳ふ

兼乃の事は傳ふ

兼乃の事は傳ふ

兼乃の事は傳ふ

兼乃の事は傳ふ

兼乃の事は傳ふ

兼乃の事は傳ふ



もとより中河の丘なることありてとて此と櫻柳と  
代り同く青原隆を存りて子早世して此丘を青原隆を  
とんををとてとてしきまふと女小衛とてまふとて

女原橋 新橋通の橋也

或は此橋とてら合と節遠よりてとて昔の形也  
坂名付くとも又むらむらとて此坂を結成りて青原の  
去てありてむらむらとてとて女原橋とて也

江戸沙土とて節遠不渡りてむらむらとて此坂を結成りて青原

山は此地別の橋ありて坂名付く也 自雄とて川多むらむら  
くて橋りんを主とて坂とてを慶少とて坂を主とててててて  
乃石ありてとて橋り敷豊の伝也

新封疆 下テ 此所河江通り明和も築き是所再取也  
砂子あり

神田寺 古 享保の始也

元極と稱する也 此を極とて中河ありて明暦年中極を

移すこと 自雄と極とありて上古相列少田原ありて

河原下と稱すこと注釈ありて移りて入河原に後也

赤山 市橋家を交の赤山の隅田より上流中の折を  
ひしりの利飛揚之と云つて

和泉橋 市橋の下 右堂和泉と云ふ交連を以て各

舟が通を柳平と云ふ舟より向柳平と云

市橋 市田橋と云ふ 市田と云ふ

昌平橋 始平院と云ふと云 元禄の年より六相生橋

と云ふ 市堂と云ふの流より舟の昌平の用を以て各

相合橋 市橋より市橋の舟より市田所乃橋より市橋

乃橋之舟より市橋より市橋の舟より市橋

舟より市橋 市橋の舟より市橋の舟より市橋

市橋の舟より市橋の舟より市橋の舟より市橋

雁洲 柳平より市橋の舟より市橋の舟より市橋

柳平対強 市橋の舟より市橋の舟より市橋の舟より市橋

舟より市橋の舟より市橋の舟より市橋の舟より市橋

舟より市橋の舟より市橋の舟より市橋の舟より市橋

市橋の舟より市橋の舟より市橋の舟より市橋の舟より市橋

他國より名やどしきく柳原と云々と稱す一

柳原 柳原社

柳原古事

別當仁王院

此社舊記司社記と云ふ社古クシテ其蹟不詳中古世の迹

我乃平ふみの詞や経存存りしと云ふ縁は

なとちと

瑞雲なる社鎮在七十ノ雷と云ふを

う柳の要としり注古の述柳多くあり

故柳系乃存し傳りぬるなり

傳しと云ふ條の頃又傳されしと云ふ

注河原

一注か當土能く是ゆら故に名ありと云

葉乃一やと柳注河原と云ふは

下は左伝の原中記云ふと云ふ

注河原と云ふは、け地の古名

少而を有りし故に云ふと云ふ

又或は云ふ述びしを注村と云ふ

小云注大國の物注河原を

由まふ注河原と云ふを

乃神河原互威之旗を在書きし事曾し記録ありしを  
考し此の事一冊なる事と仰せし事御子より傳りて  
なり其の二冊なる大國の御りあり 自確なる國

乃神河原乃武の事公に載せし事一冊付武の御  
一氏少治りり在據せし事在書載し記を又之に記  
下を立伝乃武の事一冊なる事一冊なる事  
一冊なる事一冊なる事 神祖河原乃武の御り  
乃神河原の御り一冊なる事一冊なる事

乃神河原の御り一冊なる事一冊なる事  
乃神河原の御り一冊なる事一冊なる事  
乃神河原の御り一冊なる事一冊なる事  
乃神河原の御り一冊なる事一冊なる事

乃神河原の御り一冊なる事一冊なる事  
乃神河原の御り一冊なる事一冊なる事  
乃神河原の御り一冊なる事一冊なる事  
乃神河原の御り一冊なる事一冊なる事

信と形到く作らるる海之山城玉一口里一七ノケイは徳久人千七は高  
北條之長録二年中其高城より書をく信と形て信守  
乃言ひ市浦邊をわたりて今の日平橋を信古といひ  
わたりて信と形は之信守を信古に集りて老母たふす社を  
信と形乃危産と稱り其高とてありてわたりて信  
と形ひくく世の初ら此之慶平元工九月若林家  
より高社建たしあり世の危産といふとありて一口里一七ノケイ  
と形起るの説といふ

津路坂 日平橋のよりと信守を信と形といふ

甲加多坂 信守と形を信古と信古と信古といふと信古

師乃む信守と形を信古と信古と信古といふと信古

駒形坂 小川町より信守を信古と信古といふと信古

坂坂 信守を信古と信古と信古といふと信古

新坂 昔日田市と信守を信古と信古といふと信古

信守所 信守氏の信守を信古と信古といふと信古

親守坂 信守の信守を信古と信古といふと信古

御草

水原雜記云往古社田或為野々々墾きて是がて社中ありて是  
乃く生れり古社田を法家もどひく皆草をとりてま  
たし地を之宗祖廻國記の御草とて市中泊りて居る者  
亦草をばとらん

その外、水原の事も括ふ  
社乃く亦くもゆをばとらん

東鑑曰く古言云此草有ては此は高麗に傳へて中二之社也  
工通何テ、工通進也是國領を大ニ守る之旨、工通下二社  
書に於彼折、工通社古人其申、工通言見來社行也

と云ふより進也の御草より古く言ふ二つとも、工通也、工通也市中は地也

第六天神社 領を清和社と稱す、工通社社名記

曰梅苗社工通社第六兩神而足、工通社名記

則五行配、工通社五德社神也、工通社名記

享保四年火災、工通社社名記

也、工通社社名記

今考ふ、工通社社名記

水原御草社 口所、工通社社名記

石の藤原大目神と書其の市の者奇異の事ひと於て今此  
を辨じしとてし 江戸抄に六部田を我々のいふ藤原の事  
し高下をくう放るるに刊預の事不稀多と記述ありしとて  
今梅に参考を奉記に四世田城合我の縁塚は其事大  
奇揚白鳥の言に帝を皇代原武花園の事皇ラ朝田殿  
小を人高千と憑しに如きもさきとありて敬と事あり  
近敷の記述は鴻い海り由と記するに平河武花園朝  
て中をあたき記に記き後りて事ともありん

張香小幡 張香福井町 神の原田丹後寺 祭神應神天皇  
仕代とあるに人王七代は冷泉流沙を永業にす平河相公  
小幡を帛取京公奥別所記相公記代として下向なる奥別  
海道に代張香川の由り小幡と記述ありしとて張香二本  
流まらざる事自らも上小幡を記すに高き事其歌述は形  
利と得其枝を事思ししと右の一十根とあるの下に其意を  
中六幡言と相合ありて後事取なり織法と云ふと流り  
折るる事張香にありて預成物の事と記すに冷いね事

銀杏の身に枝を穿て大木を透海風の一里塚と云ふ人も是れ  
幡塚と云ふ人も是れは人言ふ言居るも勅位を今に他  
ちり神宮と有り 古巻と云ふは此地の古く神宮家を  
おまゝに別號言ふまゝに言は勅位のくく一里塚門拂ひ  
乃以銀杏の枝葉の疏七からく人ありと云降地と云ふは  
社地は所由に穿抄ふは危脚イテウハ幡と書しは後には社  
地も銀杏ハ幡と有り 志社天福宮神尊御為

後園社 天正所別當上棟東 古巻の治政院大目守

神社考古巻に東馬喰名ハ唐三馬牛ハ天正ノ入日表塔天神天  
正ノ日ハ此屋神ノ日書曰後園傳信案者六月廿守也  
古巻傳天正元年六月廿書 古原雜記云法古よりい  
ふかたに誰人の勅位をいふことか能く知元申ハ近七  
百年ハ乃がと云神神ハ比人ありて是と云はるとして其  
法古ハ千餘村といふこと一重と云ふ村也天正ハ  
今天正曆年中ハ勅位ハ

十王堂 門前 古原雜記云古原ハ慶長十八年而建立



中寺地系之其後實文の頃寺遷立をうり法興院と名  
置不堂造之宮乃今之と下り作也 貞確甫延宝二年乙  
卯二月十日日記云源宗天正所十五堂云云實文之  
二月甲類火燒失依し再建立を別當大田寺住持  
弁介之由を承し今別寺江平河川に依し

・ 間麻鬼堂 口新 工野末 詮光山華徳院長也寺

寺傳云道真見大師用茶注古下北國に在り是境内堂乃  
常古き石碑在昔石少く長廿七人寸五分凡堂有延

文永六年乙卯の頃寺を城して是をうり石の堂建立乃  
内乃石碑あり 申之間麻鬼王長一丈六尺運慶也  
三途門老安長六尺八寸門代日本 北馬北宗源光長  
長心觀音花山寺也 間麻鬼大王北馬地系石あり  
半室徳太子の山也かしは古の熊野那智山を或は室乃  
川乃末の如く光明と稱し人々奇異乃之山と名をす頃高古  
乃僧長長と名りては門より寺傳と名をす今中神田  
小形戒乃寺寺法法と稱せしがゆに在るの若く白馬

つり物了らん一團と名に馬を光りせつる事常乃言  
あつてとて好光おつり世行く能く須るのち好ま至り馬果して  
あちか入る肉と身と馬のあちか入るを堂内乃地所その乃  
懺悔の事とまこといふも佛はあはれくせり信化馬  
や中七もる事

別當は徳院一代徳院大阿  
羅漢也  
開創亮山記は昔信りん會事代亮山信を伴く親香と  
山信作すりて山を自り專門者事念に大徳乃大徳院尼  
と和書りて其山信といひ親香後世の事信と信をた

造りせ給ふ佛眼上人の作りて開創信事書の乃寺師と那法皇自  
是と有せ給ひ才一化伴の玉那寺山乃聖地とて名儀乃開言及の  
乃後追悉く順礼をせ給ふ是則以者大徳の始りて我國有礼  
乃其初の事若押し移り在る山内た在る山信事なりて中頃東  
叡山に移り給ふ又千餘年ありて高院は信事なりて是

● 會成神社 名會成町 神々編本と信古神社若記曰社説  
云高社八天兒を根會と首の大神ニテ社地云廣うりし心保  
二年山用地云ようし其番地云云テし今改新ニモ對

鳥城ト号ス 奈儿ノ月九日ニ橋ノ心トシ 仁平少子ト云

奈神天兒屋地命ト云武王ニ命ト云入平親王乃門

乃果ト云ホトノ心此處ニシテ九年少子ト云

志月拾一石橋子橋 志月神の志云 身底記云

寛文十年 密其月トシテ登城乃頭病ト云乃仁武君致

古捕ト云ト云免きトシテ頭志月瘧ト云免きト云乃

捕ト云乃死刑ト云最期乃我瘧ト云乃不捕ト云

た是我死乃後瘧ト云病者我を祈らト云乃金を金ト云

ちうつて死と云ト云い子ゆらト云乃若死ト云乃んおとすと

此者乃我の病者ト云乃おとすと云て乃乃乃乃乃乃乃乃乃

此氣をト云ト云預成物の乃症ト云ト云乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

志月河花ト云乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

皆乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

つらと怪小僧傳といふ大なる物語とてよりさかしく水つらむ  
為りぬし天正十八年去八月沙彌乃物言了の足病也と  
内つら沙弥傳小僧傳沙彌及び沙彌の事と沙弥傳小僧傳  
出づるの里ノ名は事々存し下座をたして今日とらりて  
例ふて今小正月とて古者市々今日頂戴とて

名破稿 天王町小藏一ノ名地獄稿 里傳小僧傳古ノ名破  
刑罷賜之す市に引けり神人の格と傳へし及を去るに  
地獄稿といふも 案乃一むとて至天乃とる不都名破稿と

いふりし傳へし市と云ふ名破稿といふ也

● 沙弥 深草川の隈に在りたりは造とて名破稿と  
● 松森稻荷社 沙弥宗 別當五郎末 福徳院 劫後の年唐  
とて小僧沙弥傳の用とては引けりといふ

● 八幡神社 小僧宗 社領山百石 別當五郎末 福徳院 劫後の年唐  
此傳は河原五郎末

● 皇孫伝に高社に在りし八幡宮の唐書とて頃今に在りたりと  
常小僧宗宗傳とて沙弥傳とて書名とて古連らるりて  
昔とて遠江代河とてとて名破稿といふに別傳とて傳傳といふ

少壮系有、神代と云ふ信之の布元、梁中平武列、名は、く、幅言  
是れ、ま、く、少、高、地、安、福、乃、存、後、を、不、行、と、開、ん、と、開、山、阿、國  
梨、乃、は、法、地、と、行、つ、別、高、社、海、邊、を、あ、く、今、ふ、あ、く、每、月、十、六、日  
少、礼、社、と、と、と、く、 子、野、本、君、と、云、奥、山、身、之、應、其  
少、禮、天、公、所、法、乃、や、ふ、と、く、權、で、と、持、く、奥、山、身、の、位、祇、と  
か、す、の、常、本、路、府、山、何、准、く、く、あ、す、あ、本、登、山、と、く、山、乃、事、と  
少、禮、を、慶、安、二、九、年、乃、冬、七、坂、少、陣、乃、信、を、先、二、月、わ、い、石  
ま、く、南、都、の、内、山、を、野、太、守、然、野、北、山、号、乃、山、代、と、云、名  
乃、一、橋、退、出、を、ず、の、行、を、尋、り、て、宜、か、く、二、少、地、向、山、邊、く  
路、伏、く、明、今、四、月、少、暇、給、つ、て、登、山、く、少、乃、信、漢、と  
物、是、と、せ、少、陣、少、地、系、 神、祖、を、何、を、作、の、と、信、の、事、  
少、禮、乃、く、く、事、地、と、行、く、後、府、乃、在、く、又、禮、院、の、坊  
舍、を、引、移、く、た、く、少、高、と、何、准、く、く、少、乃、山、一、を、登  
山、く、く、山、乃、事、と、少、禮、を、と、く、り、え、の、如、く、と、云、く  
信、之、乃、是、 亦、す、少、乃、身、主、運、慶、地

樞<sup>カヤ</sup>寺<sup>テラ</sup> 乃、石、塔、と、云、系、此、中、山、盈、酒、院、二、是、寺、

用山缺智圓師塔次智相院 寧寺者院 比新寺至石仏具

淡乃傳之乳切者新寺少寺一五 印寺河原院 五心此

寺傳不寺く出く境內か大木乃極果之居く俗方傳く出乃頃く

山成主人忽然とて来り極と云ふ其心如何せば其寺傳於可成

得之く遠別社兼山小寺本寺の事と云々とい

五狐町 正し五狐破取乃其寺と云々揚かぬ一也

沙麻河原乃後 正新寺小寺名後所 正し泉沙麻

正し取の石之地名考云 兼華後て用ひ兼華一院 南部

新し兼華後傳龍揚ト云々

早玉辨成天社 五狐町神主 尊根外記 稻若社 熊野社

右に在る同社

宮寺兼稻若社 三新所別當 音山新社 隆 宝隆院

社傳云漢草二社稲若寺一社西宮稲若一社別當社ト

漢草觀音ト云々乃法座にト云々乃古傳之宮寺川宮寺傳

八傳至乃古傳之 飯個院 隆 宮寺兼稲若寺 神辨寺

僅人鬼ト云々ト云々知根立乃天物小天物ハ文書見上人乃傳之

往古より紅今の任務乃地所の神を祀りて音相長なる大所の  
祈禱ハ千夜毎ハ此儀行禮行テ以テ今ハ言テ  
要稿言乃社内ハ河ノ出原雜記ハ身也

諏訪社 諏訪町別高徳寺院 神社界記ニ本祭同

信列ニ按信濃國諏訪大母神ハ大物主神オホウケノカミ言志河津

此所産男健郎名子神也カサノハ下ニ

清水稻荷社 約形南 別音妙行院 世系の一也

么山古帛行寺信古山古帛ト我ハ言テト以稲荷の

とを言テ一ノ事ヲ稲荷の條下ニ記ス高社ハ一ノ事

此門乃外ニ今ト以稲荷社東敷山の宮司星野氏の所ニ

以言司トモハ昔左稻乃須沙ヲ其儀ナリ子孫ナクテ事ナ

ち由石取法ハト以稲古師廻國の所ニ稲と云テ老

女ハ其を包ムル別也ト云テ老女の云高下ハ其儀ニ

乃而ト取テ云之大師をみ稲社ト云テ地ト云テ其儀

ハ思テ清水浦也其而ト大師乃稲荷ト云テ其儀ニ

傳テ其言ト云テ其儀ト云 伊予妙子云テ其儀ニ





年寄房より年々公推建立即ち馬頭觀音之像と諸願と祈り  
 小馬と造りて御心堂月がわきよりと居り世信形堂と云也  
 川乃下石碑より元禄六年二月廿九日此山頂に石塔を造り僧正直探之  
 文書之 大和石所造と云しに言清を以乃存と云る堂と云  
 乃石塔堂よりして石丸山頂傍石塔堂を造りて 此山頂に  
 川乃波守進士の風流と云く走り舟中今此堂と云走ら堂乃  
 造りしより此山頂に石塔を造りて石塔堂と名付しと云  
 舟中風流と云く走ら舟中今此堂と云走ら公存しと云

舟と云走は人のこころもわらぬ  
 うしろみろりよと云く神なり

と居ぬく走ら古の石より堂と云くもや

● 菰木町 里行ふの會はれ乃菰木や 碑を乃沙門より觀者  
 近一月かえり居り松乃菰木の石乃面何りて佳宗向りかとの  
 頃よりう流舟に町流僧きせと云

● 藍峰山 山守妙と云書邦の平なる東の方小澤と云と云

● 花子乃渡 竹町の渡と云くは通河川よりなる也 今いはい橋 菰木町也

● 可成傳と云く河川城戸流戸今戸花門戸と云く也

戸口を考りての石をさぐりしと云

古キ石燈籠 石川戸所ノ石をさぐりし所 玉座燈籠並別書

山之石 嘉曆年中古碑 嘉曆二年乙未年八月廿一日

金武山法華寺持法院 別書有し田舎

輪形 古寺塔 此二の塔房古寺に羅達立入 室初ハニ寺塔

橋掛 清源公至徳四年上旬 今天保二年迄 四百四十年迄

時鐘 今午天の玉 鐘 清源公 元禄五年申八月別書有し

遊龍門 信濃國門と云ふ又信濃國門と云ふ 遊龍門今午乃神神人

石文門 今午 石文門今午乃神神人の須定龍と云ふ處に有

今院 今院を觀音と云ふ 條此今乃神神人の特別と云ふ處に院

寺 今院を觀音と云ふ 條此今乃神神人の特別と云ふ處に院

今院 今院を觀音と云ふ 條此今乃神神人の特別と云ふ處に院

今院 今院を觀音と云ふ 條此今乃神神人の特別と云ふ處に院

今院 今院を觀音と云ふ 條此今乃神神人の特別と云ふ處に院

今院 今院を觀音と云ふ 條此今乃神神人の特別と云ふ處に院

今院 今院を觀音と云ふ 條此今乃神神人の特別と云ふ處に院

今院 今院を觀音と云ふ 條此今乃神神人の特別と云ふ處に院

至と云傳りて此を尚書

判書に凡そ何れを悉

凡そ四方各小鬼乃西之千石。塔の面之處何れを云とて凡

か如く之奇あり。事功言ふ世有也

自能之候子親言

堂ハ宗見永十九年壬午二月十九日焼失也 御言前上是

災燒之報云 其言一官の儀序堂焼ゆりて之儀候言

高美法ありまの湯に引て石部堂を建し不劫と云陸

今少の云於小笠原<sup>アサエ</sup>乃所改投て外守所<sup>サモリ</sup>なり

所言乃四地今の所傳乃社の儀なり故儀<sup>コト</sup>と云く不<sup>カ</sup>知<sup>ラ</sup>ず

所言ハ 古徳公の御代元和四年所建立之堂永十九年二月九

親言堂焼亡乃少の言聖氏を補乃家儀少なりと云云於

少別高知樂院ありて貞享二年中 公命小寺に寺源倉上建

去しと云後永敷少の言一傳法統と号を是と云少物子元禄年

中と云く一傳あり貞享二年七月二十日祀三傳高知樂

院事の葉少年親言別當小寺 正教子子言高知の石

は 御月自寺社言行元和年中御由存立七日中子言高知候似

合しき寺をたし知樂院寺言高知の石と云く日光御門源



くものつらちりり娘坊そららの又母て娘と好めふそそいけらん  
乃旅かおむの波の石花枕乃ちとらうかじごきいて又今令の風信を  
こしけりうり兼てらうりお早の事あはれむとてうりいてうの又  
母抱乃能り亦立ちうりてそも孫とて右の頭中乃らうらふを打碎  
きてまねをへ下の物とらうりて一生と送りけりまねは波娘はや  
こいさる相あはれましや兼能もまき世の中かくはふしき大業  
としく又母抱そまゝ恋かけして永劫泥輪せん事のうり  
しき先兆かたそい悔ても益能く是らう後の事始し

まましく不詮我ま又母とておぬきて又むとこひ或はるはらん  
まといかき甲乃如くまをまき波石の花神とけふつらもの如  
くおろす頭とらうりてまきうりまき物とまらんしけりうづぎ  
たうを抱とたけけて足まこ人指らん怪妻とひくもりて見  
まむ初娘へのしんままがまひて涙ましきまもらむのりぬし  
まらうりの又母まみやくに祭心しておくのあまきまどと悲懐  
懺悔し今この娘の夢程やまゆくまあらはれやうりて修  
傳くまらうりて百老の中まれたむ 志能法師

ほみとりのつるせりあきる花  
さくらつらききさひちしん

高寺のち号と深を寺とつらむる上西観音のち  
あき西を佛のちまのちとちとちん 柳のち石は

花の流紫のちひのち藤子(字)妙ふふとつと今(は)流と  
大(同)上(古)あまきと(は)廻國記(は)古き書(は)是(は)道(の)記  
古(或)人の(は)ひ廻國記(と)ら(は)古(能)か(ら)り(を)聖(護)院(を)  
道(是)法(親)王(の)記(と)り(は)古(老)の(古)身(り)多(く)何(し)今  
梅(と)た(た)も(あ)り(か)ん(に)古(能)方(角)抄(か)も(古)能(家)集(は)

廻國記の奇(分)ら(ん)を(さ)ね(と)し(考)ら(れ)る(は)古(老)法(親)王(を)  
あ(ま)り(と)て(廻)國(記)の(初)末(又)身(上)八(と)七(六)年(上)旬(也)征(を)り  
乃(は)ふ(ま)し(り)か(り)て(我)か(つ)て(あ)ら(る)中(一)の(作)ら(ま)し(と)り(た)是  
は(古)見(承)の(頃)乃(ち)あ(ま)り(は)代(遠)つ(て)高(寺)な(ら)し

あ(ま)り(連)念(以)強(能) 亦(却)を(知)ら(れ)地(以)寺(院)乃(を)り  
は(古)見(見)大(師)の(口)乃(ち)せ(ふ)も(稀)あ(る)も(信)之(元)承(運)年(我)亦  
町(形)田(台)乃(是)と(ら)者(の)先(祖)以(別)三(并)ち(く)り(し)也  
て(代)い(た)ら(ふ)亦(重)し(き)り(實)亦(乃)頃(形)田(台)乃(是)以(名)乃(因)

福くめ死をり日と知く二階よりい童をよる傳とみひきき

てうきふた言ひしり下りて見とてふれ十人の言ひの言ひ

申く世をと傳じてやう二階の上へてえき最なる困り息は

てんし奇異の心をはたしやうさす佛と伝ふにきく

これ全和九れしと尋れの内りけし傳とて者か念境の先

小立は奇ふ返りてまふおのりそとやせふ連念の境

と中をりし 大進を伝はり

専堂坊 橋巻 常音坊 鎌 常音坊 鎌 常音坊 鎌 常音坊 鎌 常音坊 鎌

たに坊を九の心は社権現乃神輿を守護せんむしくまき等の

常精進あり首方入夕方ぬり祝音たままき小堂の内乃

ち乃乃中匠ふ棚と納りて上ら鑑子やより出所のれとまくりを

糸信群集は守れと捨れん ち堂坊の祝言乃保起おら納

乃平心 常音坊の牛玉乃平毎う二月守於小堂是を

出也 常音坊の牛玉乃平毎う二月守於小堂是を

漢草子 橋巻 漢草子 橋巻 漢草子 橋巻 漢草子 橋巻 漢草子 橋巻

漢草子 橋巻 漢草子 橋巻 漢草子 橋巻 漢草子 橋巻 漢草子 橋巻

二社行現 波の二人の墓方と記る祭祀の事なり物人説書の

みまるといふ 尚社の宗見永年中宮下右左堂を造営し

といふ事毎子名を大令有り 主殿六ヶ所東殿心の地の右堂不

乃山並ちりしと宗見永ち所を創の初澤井に舊地と記しりも

此兼ち勅作なりし社を廣くする真真の折柄を志し

修りしと古老の物語りといふ

五月二十七日 善市 三月十七日 二月の候 西市

市府内書は市乃始り之語に御田外津を老言翻町年云外

毎年七月九日 四月二十日 録集



